

## 平成 23 年 3 月 11 日を振り返って

平成 25 年 11 月  
いわき市双葉町仮設 南台自治会長  
齋藤 宗一

今般、東日本大震災及び、東電第一原発事故による、この度の避難に際し、ご厚情を賜りましたこと、熱く御礼申し上げます。以下の記述は、いわき市勿来の方が原発避難についての回想録をお願いできないかとのお話をくださり、応じてまとめたものです。

私は以前、農協に勤務し営農購買の勤務が多く、営農関係（営農センター、CE 等）の施設づくり（県庁通い）に従事していました。そして農協合併前の固定化再建督促整理、次に破産寸前の JA 浪江との合併事務局の責任を負いました。更に農協合併が済むと、元 JA 浪江農協の固定化債権督促整理に携わり、農協組合長の裁判担当、常磐道延線（預金獲得）の為の公団補助等、所謂交渉係を担当致しました

仕事をまとめる度に、当時の組合長、及び年上の同僚課長は私に対し嫉みを持つ方もいました。この頃から、農協を辞めたい気持ちに駆られるようになり、そんな折、隣の方が後継がない中亡くなり、その兄弟より畑を買ってくれないかとの申し入れがあり、即、農協を辞める決心（家族からは猛反対を受けた）をし、ハウレン草栽培を始めたのです。何作か経つうち、作型・味ともに栽培指導してくれた先輩をも凌ぐハウレン草を栽培できるようになり、それらが店先に並んだときのうれしさを、私は忘れることができません。その後、自分で買っても良いと思う品質の「食べても美味しい」ハウレン草栽培を目標に、頑張りました。

平成 15 年頃から、町の品評会で県知事賞などを受賞し、「双葉のハウレン草」として販売できるようになりました。町興しの一環として、日本橋高島屋にも 3 年間（19 年より冬期一週ずつ）イベント参入し、「アク少なく、歯ごたえあって甘くて美味しい」と大好評で、自信を持って、双葉の美味しいハウレン草として販売できるようになりました。イオンさん、いわきマルトさんなど、多くの方々との御交誼も賜るようになりました。改めて感謝を記させていただきます。

ただ、農協を退職後も、農協・役場・地元よりいろいろと役務を頼まれましたので、6 回転栽培できるハウレン草栽培予定を、自ら 1 一回 16 棟（1 棟収穫見込み 10 万円）減らし、役務に対応せざるを得ない状態となっていたことは残念でした。

23 年から、民生委員、農業委員等を後輩者に委ね、毎年の健康診断で「要精密検査要精検」が続いていた前立腺・大腸ガンの精密検査を受け前立腺ガン宣告を受けました。その

話を一緒に聞いていた看護婦さんに「20年後の孫の姿、見たくないのか！」と諭され、南相馬市立総合病院で前立腺全廃手術を受けました。術後、6階最上階で看護詰所脇の部屋で歩行訓練をはじめた矢先、3月11日、東日本大震災、数十分過ぎての大津波、浜街道の松林が真っ白く、青く、黒く、松林をひとのみに、家々も飲み込む大きな大きな波が押し寄せました。

私はそこから20km離れた福島第一原発が誘併事故にあっていることを直感しました。私は、家族の安否を確認し、幸いに津波等の人的被災は無く無事でした。この頃は携帯も通じ、「(自宅から10km離れた)郡山公民館(原子力災害時集合場所)で炊き出ししている」等、安否確認ができました。電気が消えたり点いたりしている様子を聞聴きながら「そんなことをしている場合でネェ～、防災訓練ではネェ～だ～。これから家サ～帰らんにごなつと～と、責任者に言って近隣知合の車の前に並ばせろ～。班編成して貴重品、通帳、印鑑など取りに戻らせて、時間を2、30分に制約して、公民館に再集束を図れ～」すると、家内は「そんなこと(よその男性に)言わんに～」その内、ドコモ携帯が通じなくなりました。12日には、私自身も病院より自主避難令を受けました。しかし、家族との連絡が容易にはとれず、車も無く避難ができませんでした。当時、家族(母、妻)は一次避難、二次避難、三次避難、そして川俣へ避難、と動いていました。家族と合流した時、家族の一員である愛犬「まる」(秋田犬)は?と聞くと、一次避難所のコンクリートの電柱につないだままとのこと。思わず家内に怒声をあげてしまいました。災害訓練の感じでした。残念でした。家内ばかりでなく部落民や町民のほとんどが、皆すぐに戻れると思ったようで原発被災の際に一刻の余裕も無い中、たとえば家族の一員である愛犬まるを一時避難所に残したまま次から次へと避難を強いられた、という訳です。

別世帯の長男夫婦家族と、私の見舞いに来ていた長女の家族、長男嫁の両親が、長男嫁の弟の郡山の自宅へ4回目の避難を始めてから7時間後、やつとのこと連絡(嫁のauの携帯)がつきました。

南相馬市立病院から郡山市への道のりは遠いものでした。実に、12日夜半から延べ2日かかったのです。先に川俣に避難していた母と妻を川俣まで迎えに行き、末娘(江戸川病院勤務)のところへ向かう移動燃料確保の為、親戚Sさん宅に私、妻、母、娘親子で一晩お世話になりました。

原発被災地域から避難する際には、放射能が降り注ぐ道路を移動避難しました。町、県、国のどこからも、何の危険指示も無いままに、です。

14日、避難道として通れない東北高速道路を横目に、4号国道を上京、夜半江戸川に到着しました(通常なら2回半は往復できる時間がかかったわけです)。この時、半分使用されていない上り車道を原発被災避難者は免許証があるにも関わらず通行避難できませんでした。国は、国会議員は何をしているのか、と、疑問に思いました。

15日は江戸川病院に行き、17日からの入院手続きを行いました。災害地での燃料不足のため、再び娘とガソリン調達を行い、宇都宮まで長男たちを迎えに出ました。こうして15日夜半、家族全員無地上京避難できました。

翌朝（16日）、腹部に異変が起き、腹部縫合部が裂けました。

急遽入院治療し、3月末（28日）に退院し、末娘の近くで、車の駐車でお世話になった正眞寺の奥様のアパートに無料避難を賜り、ほぼ4月いっぱい通院治療をしました。

その間、合間をみて、千葉、神奈川、埼玉、東京と次の避難所を探していた折、親戚から空家の紹介がありました。長男家族と一緒に世話にと考えた矢先、折よく4月末に江戸川病院より「次回の通院治療は2ヶ月後にしましょうか」との話も出、長男宗治たちも、社宅入居が決まりました。荷物移動（4月21日）をしている際に、愛犬まるが女性誌に載っていると、連絡が入りました。まるを我家に紹介してくれた従妹の石井千草さんが、たまたままるを見つけてくれたのでした。まるは名古屋のTさんのお宅へ引き取られていました。改めて、Tさんご家族様の愛情こもったまるへの対応に斎藤家一同感謝申し上げます。

その後、長男家族は社宅入りし、私たちは郷里の方々がまとまって避難している猪苗代へと移動しました。故郷を恋しく思っていたのです。郷里の方々と久々の再会は、感涙を伴うものとなりました。ただし、犬のまるを連れている私たちは、宿をとることに苦労しました。一難去ってまた一難ホテルでまるを入れる大きなゲージがないので、まるは預かれないとのことでした。

早々になんとかしなくてはと猪苗代町役場に相談すると、地域の区長さんをご紹介いただきました。しかし、犬は既に預かっているため、これ以上は預かれないとの返事でした。困っていたところ、ホテルに戻る途中で御宮境内の下枝払いをしている方々がいました。この方々は地域の「役持ち」の方々であることを直感し、早速近づいていきました。その方々が黙々と片付けをする中、まる預かりのお願いをしました。その場では返事をしかねるご様子を拝見し、私は電話番号を書いたメモにお願いを託して、その場を去りました。そして、約1時間後、携帯が振動して着信を告げました。

犬のことで相談を受けるから今すぐ公民館へ来れるか。との内容で、すぐに向かいました。連絡をくれたのは地域の元区長で新老会の会長 佐藤章さんでした。下枝払いをしていたのは部落の三役を含む新老会の面々だったのです。

会員の方経由で、まるを預かる名古屋のTさんと連絡が取れました。こうして家族皆が集まる準備ができたのです。私はお世話になった方々への感謝をこめて、仏壇に手を合わ

せ、心からの感謝を申し上げたのでした。

約束した5月3日に、名古屋のTさん宅へまるを迎えに行きますと、まるは私の足音に顔を向け私の顔を見るなり、私に絡まって、ウォー、ウォー、ウガー、ワーオと声を挙げました。いつものワンワンの犬語ではありませんでした。「迎えに来んの遅かったど〜、寂しかったど〜」と言っているようで、チョッと長い抱擁でした。

後備後部ドアを開けると、乗ったことがない車なのに、前足を乗せ、後ろ足を手伝えとばかりに、自分の後ろ足を見ている。自動車に乗ると、目尻を下げ、嬉しそうな顔。嬉しくって笑っている。立木さんが「やっぱり飼い主にはかなわない」の一言（Tさん、どうもすみません。）

名古屋を出てから、16時間かけて京都の親せき宅に行き、2晩お世話になり、帰りは北陸道を迂回して猪苗代（避難先）に戻りました。大型連休でもあり、10時間かかりました。

猪苗代のTさんにまるをお願いして次の日の早朝、散歩の後に一騒動がありました。猪苗代のTさんにはもともと2匹の親子の中型犬がいたのですが、丸はそれらとずいぶん違ったようです。Tさんが自分の犬の散歩を終えると、まるは自分のロープを戸田さんの前へ啜えて行き、更に散歩に使った手袋まで、一緒に揃えたそうです。戸田さんは感嘆し、まるの散歩をしたそうです。もうまるの手中にはまってしまうました。この日から、Tさんの散歩は朝晩2回となったそうです。

まるばかりでなく、猪苗代に避難している方々の犬猫も、この年の夏季を乗り切るため、地域の旧公民館を借りて世話ができるよう、話し合い、橋渡しをすることができました。これは、まるのお陰でした。

地域のSさんには、何かとお世話になったので、「何かお手伝い出来ることを」と言って、田植えのオペレーターをさせていただきました。真っすぐ綺麗に植わり、佐藤さんの奥様に、これからどこに行っても、また田植えに来てください。」と頼まれました。

田植えの後の早苗振り（さなぶり）にも招待され、時折、懇親交流もさせていただきました、地域、避難者の方々とも、まるのご縁で交流させていただきました。

こうした避難先地域の避難援助対応を立場が逆だったら、私どもに対応できたか？と、疑問が脳裏をかすめます。

どこの避難所でも、お世話になったことに感謝致しております。平成23年7月1日に待ちに望んだ一時帰宅が叶いました。家内（久子）とふたり行ってきました。棟瓦が落ち、屋根瓦も落ちており、天上からは雨が漏り、畳は腐り始めていました。

空間放射能線量は原発の真北になるため心配される値ではありませんでした。しかし、動く線量がすぐ上がりました。また、棚の物は落ち、タンスなど2段積みのもも全部落ちて重なり合い、それらに雨が漏ったので、どうしても腐ってしまいます。戸は軋んで動かず、外れていたり倒れていたり。窓ガラスも1/4くらいは飛び散って割れている。結局、柱は立っていても住める状態ではない。それが私の家の状態でした。納屋に入ると、積んであった物がほぼ完全に崩れており、雨の性でしょう、湿気で腐ってしまっている。庭の古木は500年前からの勇壮な姿そのままなのですが、放射能がなければ、すぐに改修保全できるのに・・・住めるのに・・・。そう思う毎日です。

猪苗代に来て5ヶ月、被災から7ヶ月、前立腺手術後のガンの転移は見られませんでした。左膝にも痛みがあり、避難移動中4人もの医師に診てもらった結果、整形外科医師全員の診察診断所見が、人工関節手術が最良と思うとの意見となり、23年7月9日に会津坂下厚生病院に入院し、11日に手術をし、25日には退院しました。期日内に一緒に大腸ポリープも切除しました。

23年10月から猪苗代の避難所となったホテルを出なければならぬこととなり、私達避難者は、各々、ポツポツと各地の仮設、借上げ住宅へと移りました。猪苗代での、犬の飼主会でのお別れ会、そして、猪苗代避難の最終日。最もお世話いただいた面々が部屋に向いてくれ、部屋での別れ会は、涙・涙・涙、となりました。

このころから、ふた月に一度は自宅に戻っています。自宅周りの空間放射線量は少なくなりましたが、動き回ると線量が高くなります。衣類等が置いてある部屋に一番の雨漏りがあり、衣類で着られるものは、もはやありません。突風も多くあるらしく、戸袋などが壊れていました。帰るたびに家屋敷は荒れ果てています。家は築85年。500年続いたわが実家・・・家が・・・庭の花木が・・・帰るたびに落胆します。

いわき市の仮設住宅に来て26ヶ月、早いものです。毎日、自治会のことばかり、自分のことなどはいつも後回し、これが先祖代々我が家の人生かな！との心意気で過ごしています。

昨年も猪苗代へ田植えの手伝いに行きました。誘いの言葉は「田植え始まったと、皆の顔見にきたら～」でした。久しぶりの再会にまるも私も猪苗代の皆も嬉しい笑顔でした。

ここ、いわきでお世話になり、仮設周辺の方々また県外の支援団体各位、地元いわき市はもちろん、警察、法人団体、仮設周囲の方々から、食料支援・物資支援・イベントなど、いろいろとご支援いただいています。長く町の中核役場が県外にあったせいか、町・県・国からの支援が、当初は全くありませんでした。周辺地域への御礼として、自治会は環境整備に努めています。月一回のクリーンアップ運動の成果もみられ、周囲の会社関係からも好意の徴が見られます。これまでの避難生活支援がもし逆だったら、私どもにもこうい

った支援ができるのか。再び疑問が脳裏をかすめます。

平成 25 年 6 月 17 日、やっと、中枢役場が県内帰還し、安堵しております。近日の報道では、東電、県、国や 首脳陣等、今にして責任逃れの意見が時折見られ、残念です。補償対応も、帰りたくても帰れない状況なのに、「包括支払いで額を纏めて支払っています」との東電の姿勢。腹部縫合部が裂けた件を以て東京電力に文書にて慰謝料を請求申し上げたところ、「例にございません」の返答。人権を無視している。反省が全くない。そして、国の指導官僚は 40 代の若い人、計算は強くても人生経験は浅い様子。

我々原発事故避難民は故郷をただ追い出されたのです。原発を推進した国に、対応や補償の姿勢はないのでしょうか。国民の安全、安心の生活を国は無視しています。

1 日でも早い避難住民への決着がつくよう努力を願うところであります。私たちに明日からの生活をください。

(了)